日本フェアプレーエピソード大賞 2023 大賞作品

学校	大井中学校 3 年
氏名	川路 心優
タイトル	「信じる」

私は幼稚園の年中から約十年間、チアダンスを本気でやってきた。私が所属しているチームで活躍する最後の全国大会がかかっている予選の大会があった。この大会で予選を通過できなければ引退だ。私には、その時、大役があった。キャプテンであり、一人で大技をするというものだ。緊張で押しつぶされそうな中、演技が始まった。私の技は演技の終盤にある。みんなが全力で踊っていた。ここまではみんなノーミスの演技だ。気持ちが最高に高ぶっている時、遂に私の技をやる番が来た。これが成功したらチームの順位はとても高くなるだろうと思っていた。だが失敗した。頭が本当に真っ白になった。練習では失敗したことなどあまりなかった。だからこそ、悔しかった。恥ずかしかった。コーチやメンバー、親に申し訳なかった。一番は、メンバーと話すのが怖かった。どんなに私に失望しただろうか。顔をあげることさえ、できなかった。しかし、メンバーの反応は思っていたものと、まったく違った。沢山なぐさめてくれて、雰囲気がむしろ明るかった。メンバーが言ってくれた。「誰にだってミスはある。ただその時が今日だっただけだよ。私たちはちゃんとキャプテンを信じているから。」と。私はこの時、「信じる」の本当の意味を理解した。ただ思い通りの結果になるように強く思い、願うことではなく、ただその人に何があっても受け止める。その人がどんな姿でも理解し、次へ次へ進んでいけるように相手を思いやれること。それが本当の「信じる」だと思った。

その事を気づかせてくれたメンバーに感謝するとともに、このメンバーと踊ることができて本当に自分は幸せ者だと強く思った。

日本フェアプレーエピソード大賞 2023 審査員特別賞①

学校	西崎中学校 3 年
氏名	儀間 一香
タイトル	「トラウマだったはずだけど…」

スポーツははっきり言うと、トラウマしかありません。サッカーでは、男子の蹴ったボールが顔に当たるし、バスケでは右手骨折したりと数々の被害に遭いました。また、グループ活動では、自分だけ仲間外れになることもあり、そのせいで、小学校時代は体育がすっごく嫌いになって…

でも、あることがきっかけで、体育をするのが楽しくなりました。2 学期でやった体育のクラスマッチです。そもそも当時の空気とは全く違っていて、「勝つぞー」という空気もあったけど、「全力出して楽しも～！」みたいな安心できる空気を感じました。その空気があったからか、失敗しても、「ドンマイ！」と優しく声かけてくれるし、得点を決めたら、「ナイス～！」と言われたり、拍手されたりと、おかげで少しずつ活躍できるようになりました。今思えば、これが「フェアプレー」かな？と考えています。

中３の今でも、「ドンマイ！」や「ナイス！」をいうことを意識して体育に取り組んでいます。私の事を安心させてくれた人たちみたいな「フェアプレー」ができるようになりたいからー。

日本フェアプレーエピソード大賞 2023 審査員特別賞②

学校	大泉学園
氏名	秋元 芽
タイトル	「私の本心」

私は現在、女子バスケットボール部に所属している。女子バスケ部には私と同じ 1 年生が 8 人いる。そのうちの 1 人の O ちゃんと私は小学校でもバスケをしていた。私は O ちゃんに負けたくなかった。1 度に試合に出られる人数はたったの 5 人。その中でも試合の最初に出る 5 人は、スタメンと呼ばれるチームの中のベストメンバーだ。その 5 人に絶対に選ばれたかったのだ。 5 人の内、 4 人は 2 年生の先輩だろうと勝手に思っていたため O ちゃんに負ければ私はスタメンになれないと思った。私の中でOちゃんは切磋琢磨しあえる「味方」ではなく「敵」となっていた。

Oちゃんは、バスケがうまかった。身長は低いがドリブルがうまく、試合の中でも状況を冷静に判断できる選手だった。私は身長が高いのを活かしたプレーをするため、私とOちゃんは試合中のポジションが全く違う。だからお互いのプレーが試合中でもよく見える。よく見えてしまうからこそOちゃんの上手さが伝わってきて 1 人焦っていた。

そんな中、私たちは他校と練習試合をすることになった。練習試合だから、スタメンではない 1 年生も全員試合に出してもらえる。私はOちゃんと試合に出た。試合が進んでいくうちに私は、きっと落ち着いていたら決められたシュートを外してしまった。きっとこのシュートはOちゃんなら確実に決めているはずだ、Oちゃんに負けてしまうと思った。そんな中私にOちゃんは「落ち着いていこう！大丈夫大丈夫！」と試合中、声をかけてくれた。ただの励ましだと思うかもしれないが、落ち込んでいた私には最高の言葉だった。

そんなことがあってから、私の考えは変わった。私はOちゃんをよきライバルであり、仲間だと思うようになった。一生懸命練習し、今では 2 人で試合に出ている。このような体験から私はフェアプレーとは相手を尊敬して初めて成り立つものだと思う。